

# 生活のなかの歌と音色

上田 雪江

幼稚園の生活で、歌を歌ったり音色を聞いたたりすることを大事にしている。子どもたちは、歌声や音

楽が聞こえてくると、その場所に寄ってきて、先生や友だちと一緒に聞いたり歌ったり、また、それぞれ遊んでいる場所で口ずさんだり、身体を動かしてリズムをとっている。そのような場面から、子どもたちが、歌を歌うことや音を楽しんでいる様子をと

りあげ、保育者・親・学生が記録した事例を述べる。

\*

## 幼稚園の保育者の記録

事例Ⅰ チューリップ

入園当初、数人の子どもたちと、花壇に水をやりに行く。私が、チューリップの花を見

て『チューリップ』の歌を歌うと、すでに知っている子どももいて、私と一緒に歌う。

記録者 上田雪江

## 事例2 こいのぼり

園庭のポールに、子どもたちと一緒にこいのぼりを揚げていると、ロープを引っ張りながら、誰かが『こいのぼり』の歌を歌いだす。すると、周りにいる子どもや保育者も歌い始める。

記録者 上田雪江

事例1は、保育者が歌った歌が、子どもに伝わっていった場面である。事例2は、子どもが歌い始めた歌が、周りにいる人に伝わって大勢で歌っている場面である。チューリップやこいのぼりなど、身近なものが歌になっているが、歌を歌うことで、その場の緊張がほぐれ、心が和らいだり、共通体験と

なっている。

三学期の二月頃、保育者仲間の永谷先生がオカリナに興味をもち、幼稚園でよく吹いているのを聞く。オカリナの音色が聞こえてくると、数人の子どもたちが先生の周りに集まって来て、聞いたり歌ったりしている。

## 事例3 オカリナの音色を聞く 四歳児

子どもたちは、幼稚園のそれぞれの場所で、ゆったりとした時間の流れをつくって遊んでいる。五歳児

の部屋は、四、五人の子どもたちが、かるたやオセロをしている。そんな雰囲気なのか、私はオカリナ



が吹きたくなり『うれしいひなまつり』の曲を吹く。すると、周りで遊んでいる子どもたちの中から『うれしいひなまつり』の歌を口ずさむ声が聞こえてくる。

そこへ、四歳児の愛美が部屋に入ってきて、「ひなまつりの歌、聞かせて」と言う。

私は、愛美に応じて最初から吹き始める。愛美は私の隣の椅子に座って聞いている。そこへ、五月が部屋の戸を開けて「めぐちゃん、ちょっと来て」と呼ぶ。愛美は、五月の方をちらっと見て、「今、この歌聞いているの」と言う。すると、五月は、愛美の側まで来て愛美の腕を引っ張りながら「ちょっと来て」と言う。愛美は、さつきより大きい声で「めぐちゃん、この歌聞きたいの。この歌は四番まであるの」と言う。五月はそれを聞くと愛美の腕を離して「じゃあ、あとから来てね」

と言って、出て行く。

私は、そのまま四番まで吹く。愛美はじつと聞いている。吹き終わると、「ありがとう」と言って、部屋を出る。少しして五月と廊下を歩いている愛美を見る。

記録者 永谷裕子

事例3に述べた記録は、オカリナを吹く保育者とその音色を聞く子どもの姿である。愛美は、友だちの誘いに対して、オカリナが聞きたい意志をはっきり伝えている。そして、保育者が吹くオカリナと、その音色を聞く子どもとの関係は、オカリナを共有しながらその場と時間は子どもものものになり、また保育者のものになっていると考える。

#### 事例4 歌で語りつがれている歌

以前に、劇団四季ミュージカル「むかしむ

かしゾウがやってきた”の地方公演を、幼稚園から親子で観に行った折りのことである。

帰りのバスの中で、この作品の主題歌『みんな みんな ともだち』（梶賀千鶴子・作

詞／鈴木邦彦・作曲）の歌を誰からともなく

「♪どんな小さなひな鳥も、どんな大きなぞうさんも、そしてここにいる私たちも、たった一つの命をもって……」と歌いだし広がっていく。私も歌がうたいたくなりパンフレットの楽譜を見ながら歌った。

記録者 上田雪江

事例4にでてくる『みんな みんな ともだち』の歌は、今でも幼稚園で歌い継がれている。私は、子どもたちが入園してから、日々成長していく姿を見る度に、命を大切にし、命について考えられる人になってほしいと願っている。また、自分のこと

も、友だちのことも、大切に考えられる人になってほしいと願っている。このような意味をもった、語り合える歌をいくつか、子どもたちや親に紹介している。そして、幼稚園の生活の折々にみんなと一緒に歌っている。

### 家庭での親の記録

#### 事例5 秋の歌

三歳児

桃子は、ブランコで立ちこぎをすることがとても楽しい時期のようです。家に帰っても公園のブランコで立ちこぎをしています。空は雲ひとつない秋空で、「きれいだなあ」と思っていると、桃子が立ちこぎしながら「♪秋はいいな 涼しくて お米が実るよ 果物も……」と歌いできました。幼稚園で覚えた歌をこんなところで、こんな風に歌えるなん

て、「この子は幸せだなあ」と思いました。

記録者 金泉幸子

### 事例6 びわの歌

五歳児

夕食の後、「今日『びわ』の歌を歌ったんだよ」と言っていて、まあいい歌声で聞かせてくれるのです。「そういえば……」と思って、先週、あおぞら号（移動図書館）で借りた『うたのほん 一ねんせいになったら』（まどみちお・詩／長 新太・絵）を見てみるとその中に、『びわ』（まどみちお・作詞／磯部 倅・作曲）の歌がありました。私がピアノを弾いて、裕紀は私の膝の上や横で『びわ』の歌を繰り返して、繰り返して何度か歌って楽しめました。他にもいろいろな曲を歌いました。ほんとうに楽しかったですよ。

記録者 品川晶子

事例7 自分から歌いだ

した歌 三歳児

私は、歌が好きで、太

郎が生まれて大きくなる

につれ、太郎に歌を教え

ようと、一緒に歌うようにしてきました。し

かし、太郎は口を固くつむり、歌いません。

でも、私は「歌わんか、歌わんか」と言っ

てきました。やはり、口を閉ざし、歌いませ

でした。それが入園してから、家で歌うので

す。私も一緒に歌うと、「かあちゃんは黙って

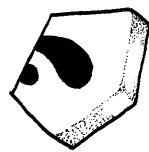
ろ」と言います。

記録者 三宅直子

事例5・6・7は、親が幼稚園に知らせてきた記

録である。事例6に述べた記録は、子どもが幼稚園

で覚えた歌を家庭で親と一緒に歌い、なごやかなひ



とときを過ごした様子である。子どもたちは、幼稚園で体験したことを自分のものにして、家庭でも歌っていることがわかる。このように、幼稚園の生活で音色を聞いたたり、歌を歌うことは、音楽が好きになっていくことにつながり、また生活が豊かに広がっていくと考え大切になっている。

### 幼稚園における学生の記録

#### 事例 8 歌が歌いたくなるとき

子どもたちは、十一時半頃より、遊んだ後、片付け終えた人から順に、先生のまわりに集まってくる。みんなが集まると先生のピアノに合わせて『子どもの世界』を歌う。子どもたちは、しっかりと声で三番まで歌詞をはっきりと歌っていた。また、お弁当を食べて遊んだ後、子どもたちが帰り支度をして

集まったときは、『おどろうたのしいボールチケ』を歌った。子どもたちは、この歌を、遊びのなかでよく歌っていて、この歌が好きだということが伝わってくる。一・二番、歌い終わった後、子どもたちが立ち上がって、歌に合った身振りをつけながら三番を歌い始めた。「♪どんぐりの実、とっさりこ……」の歌詞のところでは、手を大きく広げ、リズムにのってゆつくりと、どんぐりを拾うしぐさをする。「♪どんぐりころこおろころ……」では、体を小さく丸めて、自分がどんぐりになったように前にころがっていく。体をリズムにのせて歌っている様子に、私も思わずひきこまれた。これは、昨日、T男が考えて踊りだすと、次から次へと子どもたちも踊りだしたそうだ。

私の幼稚園時代の記録や、これまでの幼稚

園実習経験から、幼稚園で歌う歌は、保育者が歌詞を紙に大きく書き、まず、保育者が歌って、子どもが覚えていくものだと思っていた。それは、生活から切り離された歌であり、歌を指導するという場になっていた。

小鳩幼稚園では、子どもたちは、さまざまなどころで、自然に歌を歌っていることに気が付いた。それらの歌の歌詞を子どもたちほどのようにして覚えていくのか、先生方はどのように教えているのか不思議に思い、その後、先生に質問をした。それに対して上田先生は次のように言われた。

子どもとの生活で、ふと歌が歌いたくなることがある。先生が、歌うことが好きで、口ずさんでいると、子どもたちは自然に覚えていく。そのような場面を大切にしている。例えば、『おどろろたのしいポーレチケ』の歌

もそのひとつである。幼稚園のそばに森があり、そこには、どんぐりの木が数本ある。どんぐ

りの実がなる頃には、子どもたちは、毎日のようにどんぐりを拾いに行っている。その様子を見たり、子どもと一緒に拾っていると、この歌が歌いたくなる。また空を赤く染めながら夕陽が沈んでいくのを見ると、「♪夕陽の色ぎんぎらら〜」という四番の歌を歌いたくなる。次の日、森が夕陽で染まったことを子どもたちに話すと「ほくも、昨日その夕陽を見た」と言う子どももいて夕陽のことが話題になった。子どもは、自分の生活体験や先



生と一緒に話すことから、四番目の歌詞の意味がわかって歌うようになった。

記録者 山口大学学生 大木裕子

事例8では、学生は、自分の経験から、幼稚園で歌う歌は、幼稚園の先生が紙に書いて教えるものであると考えていることがうかがえる。しかし、子どもたちは入園する前に、すでに家庭でいくつかの歌を覚えていて、それを大切に考えたい。親が、子どもに歌を歌って聞かせたり、また、子どもたちはテレビなどを通じて、見たり聞いたりして歌をおぼえている。私は、幼稚園生活で、子どもに歌を歌って聞かせたい、歌で語りたい、子どもと一緒に歌いたい、という気持ちから歌を歌っている。私が歌っている歌を聞いて、興味をもった子どもたちは、いつしか歌を覚え、体をリズムにのせて口ずさんだり、歌を歌いながら絵を描いたり、砂場やブランコで遊んでいる。

ここでは、学生・保育者・親の記録をもとに歌を歌うことを例に揚げて、保育者の考えを述べてきた。日々の園生活で、このような場面を大切に考えて、子どもたちと過ごしていくことが、歌を好きになっっていくことにもつながっていくと考える。子どもたちが歌うことを好きになると、その歌は生活にとけこんでいる。学生は、保育に参加して、幼稚園の日常を体験し、その背景にある保育者の考えを聞いて、さまざまなことを学んでいく。

(山口・小鳩幼稚園)

引用文献

日本保育学会第四十九回大会発表論文集 P. 216 ~ P. 217  
「幼稚園の生活で学生が学んでいることがらと幼稚園の保育者の考え」 上田雪江・磯部景子

山口大学教育学部幼稚園課程 平成五年度卒業論文  
「ことは遊びについて ことばに対するもう一つの視

線」 大木裕子